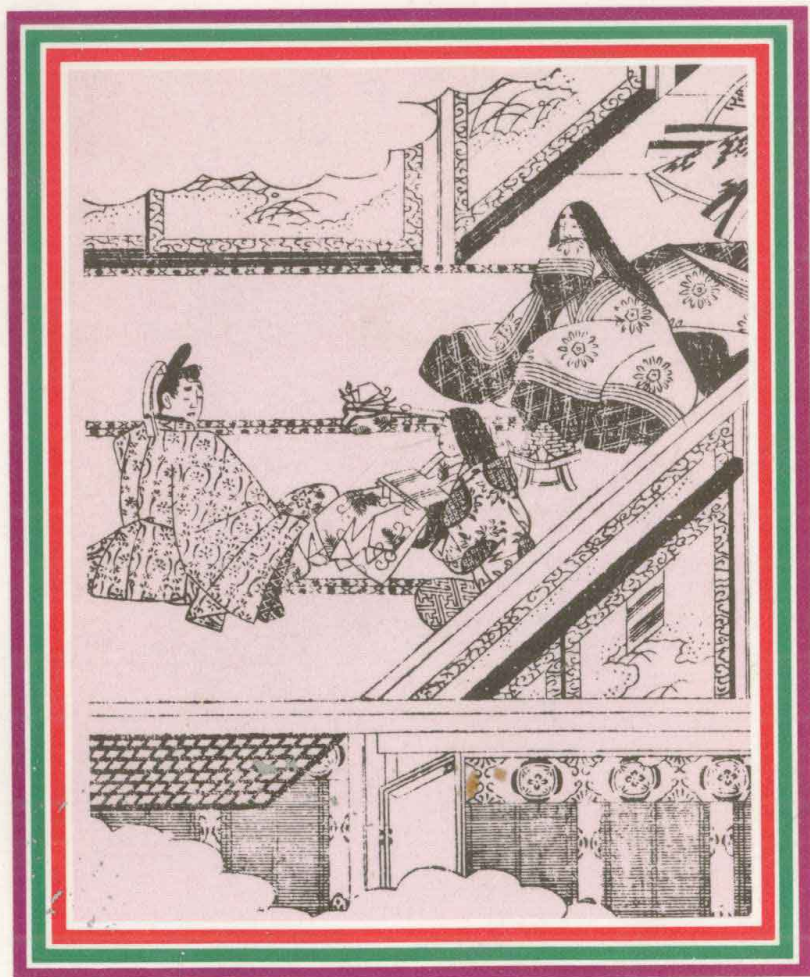


百人一首一夕話

(下)

尾崎雅嘉 著

古川久 校訂



岩波クラシックス17

百人一首一タ話(下)[全2冊]

岩波クラシックス 17

1982年11月18日第1刷発行 ©

定価 1400 円

校訂者 ^{ふる}古 ^{かわ}川 ^{ひさし}久

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所 株式 岩波書店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・文勇堂

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

百人一首一夕話

(下)

尾崎雅嘉 著
古川久 校訂

岩波クラシックス

目 次

卷 の 六

能因法師	嵐吹く三室の山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり……………	二
良暹法師	淋しさに宿を立ち出でて眺むればいづくも同じ秋の夕暮……………	三
大納言経信	夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろ屋に秋風ぞ吹く……………	六
祐子内親王家紀伊	音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ……………	完
権中納言匡房	高砂の尾上の桜咲きにけり外山の霞立たずもあらなむ……………	四
源俊頼朝臣	憂かりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを……………	五
藤原基俊	契り置きしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり……………	三
法性寺入道前関白太政大臣	わたの原漕ぎ出でて見れば久方の雲居にまがふ沖つ……………	三
白波……………		三

巻の七

崇徳院	瀬を早み岩にせかるゝ滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ……………	八
源兼昌	淡路島通ふ千鳥の鳴く声にいく夜寝覚めぬ須磨の関守……………	二六
左京大夫顕輔	秋風にたなびく雲の絶え間より洩れ出づる月の影のさやけさ……………	二八
待賢門院堀河	長からむ心も知らず黒髪の乱れて今朝は物をこそ思へ……………	二三
後徳大寺左大臣	時鳥鳴きつる方をながむればたゞ有明の月ぞ残れる……………	二五
道因法師	思ひ侘びさても命はあるものを憂きに堪へぬは涙なりけり……………	二六
皇太后宮大夫俊成	世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる……………	四二
藤原清輔朝臣	ながらへばまたこの頃やしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき……………	四八
俊恵法師	夜もすがら物思ふ頃は明けやらで関のひまさへつれなかりけり……………	五

巻の八

西行法師	歎けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな……………	一六
寂蓮法師	村雨の露もまだひぬ槇の葉に霧立ち上ぼる秋の夕暮……………	一八
皇嘉門院別当	難波江の芦のかりねの一夜故みをつくしてや恋ひ渡るべき……………	一五

式子内親王	玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶ事の弱りもぞする	一七
殷富門院大輔	見せばやな雄島の蟹の袖だにも濡れにぞ濡れし色は変らず	一八
後京極摂政前太政大臣	きりくす鳴くや霜夜の狭筵に衣片敷き独りかも寝む	一九
二条院讃岐	我が袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそ知らねかわく間もなし	二〇
鎌倉右大臣	世の中は常にもがもな渚漕ぐ蟹の小舟の綱手かなしも	二〇
参議雅経	み吉野の山の秋風小夜ふけて古里寒く衣うつなり	二四

巻の九

前大僧正慈円	おほけなく憂き世の民におほふかな我が立つ袖に墨染の袖	二二
入道前太政大臣	花誘ふ嵐の庭の雪ならでふり行くものは我が身なりけり	二五
権中納言定家	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつゝ	二六
従二位家隆	風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける	二七
後鳥羽院	人もをし人も恨めしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は	二八
順徳院	百敷や古き軒端のしのぶにもなほ余りある昔なりけり	三〇

解 説		三三
作者索引		三九
和歌索引		四一
話 索 引		四五

百人一首
一ひと夕よ
話がたり
下

百人一首一夕話 卷の六

目 録

能因法師 歌の訳

能因小食の話

三島明神に雨を祈る歌の話

ふし柴の加賀の話

良暹法師 歌の訳

大原山荘の話

まくり手の話

関の石門の話

大納言経信 歌の訳

经信三船の才の話

犬目の少将の話

井出の蛙・長柄の橋の鉋屑の話

白河の関の歌の話

能因古會部の家の話

長嘯子大原の歌の話

郭公長鳴と詠みたる歌の話

玄象・牧馬の琵琶の話

怪物詩を吟ずる話

高麗王かうらい日本の名医を乞ふ話

天下判者の話

祐子いうし内親王家ないしんわうけ紀伊きい 歌の訳

堀河院えんじよあはせ艶書合の話

権中納言ごんちゆうなごん匡房きやうぼう 歌の訳

匡房四歳にして書を読む話

隆方たかかた・実政さねまさ争ひの話

江家ごうけ書籍しよじやくの話
匡房きやうぼう東琴あづまことの歌の話

源俊頼みなもと朝臣あそん 歌の訳

難後なんご拾遺作者しゆいさくしやの話

我が名を歌に詠み入るゝ話

基俊もととし・俊頼しゆん不和の話

淀の渡りわたの歌の話
鏡宿かきみ遊女あしゆく俊頼の歌を歌ふ話
風のはふりの話

藤原基俊ふぢ 歌の訳

維摩会ゆゑ講師かうじの話

俊成しゆんぜい基俊を師とする話

法性寺ほつしやうじ入道にふだう前関白くわんぱく太政大臣たじやうだいじん

頼長よりなが・忠道ただみち不和の話

最勝寺さいしやうじの額の話

しめぢが原の歌の話
基俊俊頼の歌を難ずる話
歌の訳
法性寺ほつしやうじ殿流と称する話

能因法師

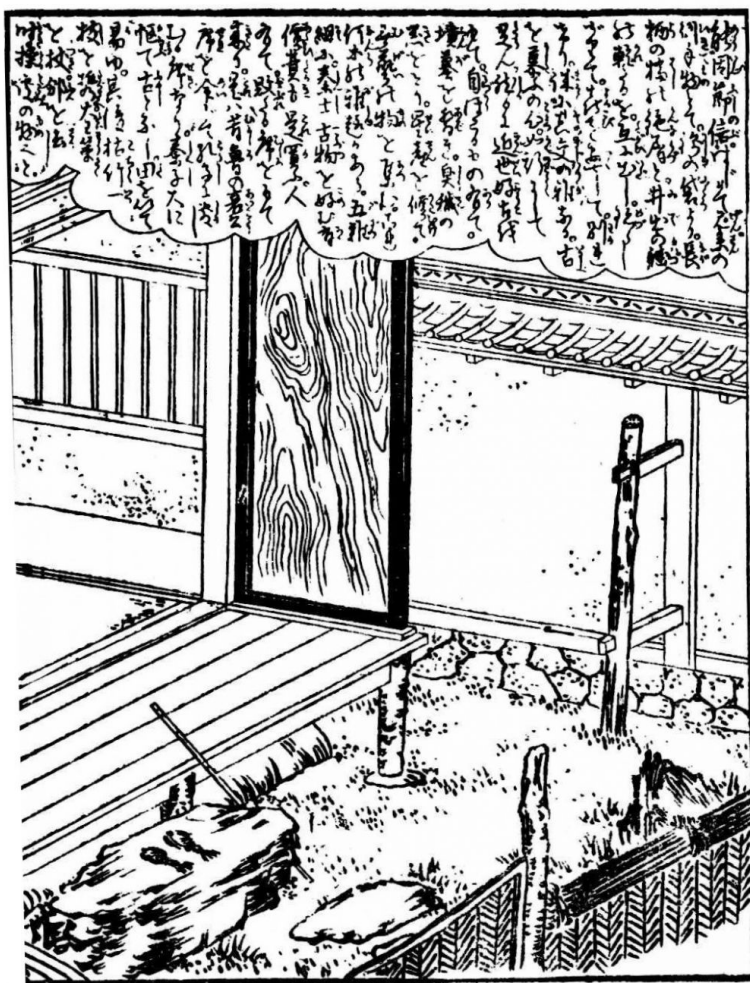
父は肥前守元愷もとやすといへり。また一説に遠江守忠望たづもちの子なりしが、兄の肥前守元愷の養子とせられし故、俗名を永愷ながやすといへり。

嵐吹く三室みむろの山のもみぢ葉は竜田の川の錦なりけり

後拾遺集秋下に、永承四年内裏の歌合にとあり。歌の心は嵐の吹く三室山のもみぢ葉が、その儘竜田川へ散り来て流るゝが錦と見ゆるといふ事なり。三室山は大和の高市郡たけのこほりにあり。竜田川は竜田山の麓に流れて平群郡へぐりのこほりなれば、高市郡よりはほかの郡をも隔てて遙か西北に当りて川の流れさへ異なれば、三室山の紅葉がこゝに流るべきにあらず。古へも歌詠む人の地理をよく考へられざりし事あるなるべしと契冲けいちゅうはいへり。

能因法師の話

能因俗名を橘永愷もろえといへり。橘左大臣諸兄公十代そんの孫、遠江守忠望の子なり。永愷若かりし時文章もんじやうのしやう生にて肥後の進士しんじと号し、生得和歌を嗜めり。この時藤原長能ながたふ歌詠みの名世に高かりしに、



或時永愷ほかに往く所ありけるが、はからず長能の家の前を通るに車の輪損じければ、替車かへぐるまを取りに遣す間、かの長能の家に宿りて始めて対面を乞ひ、日頃まうでたく存ぜしが今日はからずかう／＼の事侍りて、御家に宿るのみならず幸ひに対面賜はる事の喜ばしき由申して、たゞちに長能と師弟の契約をせられぬ。さて歌詠むべき心ばへ問はれければ、長能申さるゝには、

山深み落ちて積れるもみぢ葉のかわける上に時雨降るなり

かやうに詠ぜられよと示されければ永愷深く感服して、つひに長能を師として仕へられたり。昔より歌の事につきて師匠を定むる事なかりしに、この人より和歌に師弟を称する事始まれり。その後永愷剃髪して融因ゆういんといひしが、また能因と改められたり。津国の古曾部こそべといふ所に生まれし故、世に古曾部の入道ともいへり。毎年古曾部より花盛りの頃は都に上ぼりて、大江公資きんすけの五条東洞院ひがしのとうあんの家に宿せられたり。それはこの家の南庭に桜の樹ある故に、その花をもてあそばんが為なりし。この公資は歌詠みの相模さがみが夫なり。能因この家へ来らるゝ時は、いつも勸童丸くわんどうまるといふ童一人を召し連れられたり。さて公資の孫の公仲きんなかに教訓せられけるは、とかくに歌を好き給へ好きぬれば歌は詠まるゝものぞと、いつもこの事をいひて諫め勧められけるとぞ。この事はすなはち公仲の子の有経ありつねが、清輔朝臣に語られける趣きなり。能因は極めて小食せうしょくなる人にて、兼房朝臣の許に来らるゝ時も、菜は食せずして僅かに飯いひばかりを食はれしかば、兼房怪しみて食事の時うかゞひ見るに、かの勸童丸を召しよせて彼が懷より紙に包みたる物を取り出でて、飯に加へて

食せられたり。粉の如きものなりしが何物にかありけん、いぶかしかりし由なり。

また兼房或時能因と同車して二条東洞院を通られしに、能因にはかに車より下りらるゝ故、兼房怪しみてその故を問ふ。能因の曰くこゝはこれ昔の伊勢御の古跡にして、その時の松なほ今にあり、あに無礼にして過ぎんやとて、かちを行く事数百歩にしてかの松の木の見えぬ程に到りてまた車に乗られたり。歌の道を重んぜらるゝ事、かくの如くなりしとぞ。また帯刀藤原節信といふ者あり好事の人にてありけるが、或時能因に逢ひて相互に心の合ひければ喜ぶ事はなはだし。能因節信に向ひて、始めて見参いたしたる引出物に見せ奉るもの侍りとて、懷より錦の小袋を探り出でたり。その中に鉋屑一筋ありけるを見せて曰く、これはこれ長柄の橋を作りし時の鉋屑なり我れこれを宝の如く愛する事久し、今日君が為に取出でたりと申されければ、節信大いに喜びこの人もまた懷より紙に包みたる物を出だせり。能因取りて開き見られたれば、蛙の干ばしなり。節信曰くこれはこれ井出の蛙に侍りとて、相共に珍らしがりて喜びを尽して別れられたり。また伊予守藤原実綱といふ人あり。任に当りて伊予におもむくに、能因この人につきて下られたり。折しも夏の初めなるに久しく早しければ民の歎き浅からざるに、神は和歌に賞でさせ給ふものなり、試みに歌詠みて三島の明神に奉るべき由を国司しきりに勧められければ能因、

天の川苗代水にせき下せ天降ります神ならば神

と詠めるをみてぐらに書きて神司して捧げたりければ、炎旱の空にはかに曇り渡り大雨降りて三